

2025.4
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみや 富薬

4号

第47巻
No.429



ドイツズラン *Convallaria majalis* L.

(ユリ科 *Liliaceae*)

生薬 スズラン（鈴蘭） 春の開花期に掘り取り、全草を陽乾する。

成分 強心配糖体：convallatoxin, convallatoxol, convalloside、サポニン：convallasaponin A, B, C, D 等。

効能 強心利尿薬として用いたが、毒性が強く現在は用いない。観賞用に栽培される。

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



アイルランドではフェアリー・ラダース（妖精の階段）と呼び、こびとがこの花に足を懸けて駆け上がった、駆け下りたりして遊んでいる様子が目に浮かび、何かメルヘンの世界を感じさせてくれる植物です。国内では北海道でしか見ることが出来ない花だと思っていましたが、葉の世界に入ってから、どこの薬草園でも見ることができ、時期になると園芸店で鉢植えを見かけたり、庭の木陰に植えてあるのを見かけるようになりました。後で分ったことですがどれも耐暑性があるドイツスズランでした。

ヨーロッパ原産で観賞用によく栽培されています。根茎は細長く横に伸び、多くのヒゲ根を出します。草丈は20-30cm、密に群生します。葉は2枚が根生し、卵状長楕円形で全縁、基部は鞘上の葉柄になります。葉の下部にある鱗片葉の腋から高さ15-30cmの花茎を出し、葉よりも高くなります。花茎は長さ10-30cm、花序は一方に傾いた総状花序となり、5-15個の花を下向きにつけます。花には強い芳香があり、径1cmほどで白色の広鐘形、花被片は白色で6個、花被片の先は反り返ります。国内で栽培される種の花糸は基部が淡紫色で、日本のスズラン（花糸基部は白色）と見分けるポイントとなります。花期は5-6月。液果は直径6-12mmで球形、赤熟します。種子はほぼ球形、直径3-4mmです。

キリスト教の復活を祝いスズランを飾りますが、元々は北欧神話の春の女神、オスタラを祀るものであったと伝えられています。オスタラのシンボルこそがスズランです。ゲルマン系の人々はやっと巡ってきた春の歓びをオスタラを称えて祝ったのでしょう。キリスト教が支配する中世ヨーロッパになるとオスタラと聖母マリアは習合され、ヨーロッパの民俗伝承としてスズランは聖母マリアが十字架の下で涙を流し、その涙が地面に落ちて咲き出でた花とされました。そもそも今のパレスナチ周辺にはスズランは自生せず、作られた話であることははっきりしています。

日本に生育するスズラン(*C.keiskei*)はドイツスズランの1変種(var.*keiskei*)と分類する人がいるほどドイツスズランとよく似ています。冷涼な地を好み、北海道や本州の高地の草地や林下に群生します。稀に九州でも自生がみられます。地下茎は細長く横に伸び、たくさんのヒゲ根を生じます。草丈は15-20cm。葉は卵状楕円形で、通常2枚が鞘状になって出ます。表面は濃い緑色、裏面は粉白色を帯びます。花序は長さ5-10cm、花茎には5-10輪の花が咲き、長さ6-8mmの花被片が反り返った鐘形の花を付け、ほのかに芳香があります。花期は4-6月。液果は球形で赤熟します。ドイツスズランと比べると小型で、花の香りも弱く、花茎が葉より短いところが異なります。

群生地、北海道ではアイヌの伝説の中でよく語られています。「昔、ある村に酋長の娘カバラベとキロロアンという青年がいました。若い二人は互いに惹かれ合っていました。キロロアンは村の猛者として知られ、毒矢を携えて山へ熊狩りに行きました。一頭の大熊と出会い、矢を放ったが熊の反撃にあい、自らも重傷を負い、血まみれで息絶えてしまいました。そのことを聞いたカバラベはキロロアンのそばに駆け寄り、マキリ(小刀)で自らの喉を突き刺して命を絶ちました。二人の血は周囲のスズランの花を真紅に染め上げたそうです」と言う悲恋物語ですが、スズランは別の意味も持っています。スズランはアイヌ名を「セタキト」と言います。「セタ」は犬、「キト」はアイヌネギ(ギョウジャニンニク *Allium victorialis* subsp. *platyphyllum*)、すなわち「犬のネギ」ということで、地上部の姿がよく似ていますが、毒性が強く食べることができず、逆に忌み嫌われたようです。同じユリ科ですが、花の咲き方が異なることと強いニンニク臭が異なり、見分けることができます。(村上守一 記)